

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	
宮田 剛志 先生	おすすめメッセージ
<p>① 図書名：新・知的生活の方法 知の井戸を掘る</p> <p>著者：渡部昇一</p> <p>出版社：青志社 ISBN：9784865901597</p>	<p>自分は何がしたいのか？自分は何になりたいのか？何をもって自己実現をしたいのか？等々の「知的生活」の原点とされている点や、その上で、どこまで本当に「自分のやりたいこと」ができているのか？(pp.18-19)に關しての考え方の1つが示されています。何より、「知的生活」を送るには、「経済的自立」がなければなりたたないことも明白かと考えます。それを立派に両立された格好の先達として本多静六先生に關して、概要的な説明がなされておられます。その際、サミュエル・スマイルズの『自助論』等に關しても同様です。自助とは、勤勉に働いて、自分で自分の運命を切り拓くことであり、現代流に言えば、自己実現ということになるようです(pp.226-241)。自分のための人生をどういうふうと考えていったらよいのか(p.6)に關しての端緒の中の1冊と考えます。</p>
<p>② 図書名：新しい農村政策 その可能性と課題</p> <p>著者：小田切徳美・筒井一伸・山浦陽一・小林みずき</p> <p>出版社：筑波書房 ISBN：9784811906584</p>	<p>農政における農村政策の位置付けは、古くて新しい論点です。主要な政策文書の中で、「農村政策」がタイトルに付されたのは、1992年の「新しい食料・農業・農村政策の方向」が嚆矢でしょう(p.2)。本書では、その後の農村政策の歴史的経緯を振り返りながら、2020年、食料・農業・農村基本計画で新たな農村政策としてまとめられた方向性が、その後、2022年4月に『新しい農村政策のとりまとめ』として公表され、さらに具体策が提案されていく一連の流れに關して整理がなされております(p.75)。加えて、「農山漁村発イノベーション」、農村 RMO、「農的関係人口の創出・増大」といった全国各地域の取り組み等に關しての概要的な説明もなされております。ポストコロナの農村に關する理解を深めるにあたり最適、かつ、最新の図書の1冊です。</p>
<p>③ 図書名：日本の保守とリベラル 思考の座標軸を立て直す</p> <p>著者：宇野重規</p> <p>出版社：中央公論新社 ISBN：9784121101327</p>	<p>「保守」と「リベラル」という図式は、あたかも自明の存在のように見えるかもしれませんが、これらの言葉を少しでも踏み込んで考えてみるならば、両者の関係は、決して明快なものではないようです(p.4)。しばしば戦後日本を代表する「近代主義的知識人」とされ、日本の過去や伝統をもちばら克服すべき対象として捉えた理論家としての語られることの多い丸山眞男は、ある意味で、日本に信念を持った保守主義を望んでいたとさえ言えるかもしれないとされています(pp.27-28)。一方、「リベラリズム」は、正義や公正、他者への配慮など普遍的な価値へのコミットメントを意味し、このような意味での「自由」や「リベラリズム」は、いまや世界的な共通の価値観となりつつあり、日本においてもこれに共感する人が圧倒的多数であるのでは？とされています。とはいえ、日本において「リベラル」を語ることは、議論の混乱、立場の曖昧さ、非現実的な理想主義等々とされることもあるのでは？とされています(pp.96-97)。そこで、本書では、欧米の政治思想史を参照しつつ、近現代の日本の保守とリベラルに關して、その系譜を辿りながら読み解こう(カバーの裏)とされている1冊となります。</p>